

■ 演題・抄録

歯科界におけるチーム医療の在り方

修復治療の変遷、そしてこれからの歯科治療

修復治療とは、患者の精神的、肉体的健康の“要”となる口腔の健康を“形状”として回復することにあると思います。それは口腔の失われた硬組織あるいは軟組織を適切な材料を選択して、生物学的、心理学的、機能的そして審美的形態と状態に創生することにあります。

すなわち、修復治療とは「そこにあるべき“姿”をそこに創生する」ことであると思うのです。

百年前、人間の寿命は先進国における統計で40代と言われていました。

神様は、私達人間に乳歯と永久歯という二つのセットの歯を与えてくれます。

人生40年のその時代は、二つ目の歯を永久歯と呼ぶことができました。しかし、80歳の誕生日を迎えるのが当たり前の現代においては、二つのセットの歯では足りなくなってしまうことが多くあります。したがって、三つ目の歯は、自然に代わり神に代わって、私たち歯科人が担うこととなります。

インプラントなど多様な修復治療技術の中から患者固有のニーズに適応する方法を選択することが肝要だと思います。有能な歯科医師と高度な歯科技工技術を有する歯科技工士によって作られる“三つ目の歯”は、患者がその存在さえも認識せずして違和感なく生活を営むことができるレベルのものとなってきています。生体親和性の高い材料で作られる修復装置は、健全な咀嚼機能、発音機能、審美性、清掃性そして修復物としての強度も保証できて、長期に歯科的健康を維持（ロンジェビティ）することのできる歯科医療レベルにあるからだと思います。

この機会に、1960年代初め、金属焼付ポーセレン開発当初に行ってきた臨床、1970年代にはどのような過程を経て発展してきたのか、そして1980年代の成熟期に行ってきた修復治療が今日2000年代に、口腔内でどのように機能しているのかの臨床を経年的、数十年にわたって検証してみたいと思います。

その上で私自身が患者として体験した矯正治療、インプラント、PFMクラウン、CAD/CAMテクノロジーを応用してのオールセラミッククラウンそしてオールジルコニヤクラウンによる修復治療について自らの見解を提示し、皆様と共に、これからの歯科を発展的に考えてみたいと思います。

自由研修

佐藤幸司

『総義歯臨床学のガイドラインと根拠』

(講演抄録)

総義歯の臨床技工で大切なことは、担当医による正確な印象採得と咬合採得から、人工歯排列を適切な

ガイドラインにより、患者固有の顎堤に沿って効率良く実践することだとされている。

しかしながら、日常の臨床において、絶対的な診断法の確立は未だに完成されていない。そこで臨床技工では、経験と知識で補足することが求められている。

また、CAD・CAMにおいても臨床で迷った症例に遭遇した場合に、根拠ある臨床的ガイドラインがあれば、

経験値のみでなく、より効率的な咬合平面の設定と咬合術式が重要となる。

今回のセミナーでは、上下顎の臨床模型を組織学的に分析し、歯冠修復学・インプラントの技工にも役に立つBPSの

補綴的ガイドラインを、より客観的にお示し出来ればと考えています。また時間の許す限り職業倫理となる

歯科技工のフィロソフィーについて御参加戴いた皆様と共に考察したいと思っています。

加藤敬太 『歯科医療従事者における経営センスの磨き方』

小樽商科大学商学科，准教授 現代商学専攻(博士前期課程)

【略歴】

1977年兵庫県生まれ、愛知県育ち。

和歌山大学経済学部卒業。滋賀大学大学院経済学研究科経営学専攻修了。大阪大学大学院経済学研究科経営学系専攻修了。博士（経営学）。

2010年より現職。専門は、経営組織論・経営戦略論。

老舗企業やファミリービジネスの長期存続のメカニズムについて研究している。最近は、地域企業の価値創造や地域活性化のマネジメント、企業家活動にも関心が広がっている。研究スタイルは、現場重視のフィールドワーク。北海道庁委員、札幌商工会議所委員、さっぽろ産業振興財団委員などを歴任。

【抄録】

歯科医療従事者の多くは、経営学とはあまり縁がないかもしれませんが。しかし、良い歯科医療を世に提供するためには経営学を学ぶことは不可欠です。歯科医療専門の技術や知識を持っていてもマネジメント感覚がなければ宝の持ち腐れ。歯科医療ならではの価値創造に向けて手探り経営から脱出する方法と考え方を伝授したいと思います。